

バスケットボール選手の性格特性と ゲームにおける特徴について

倉 島 武 徳

I 目 的

現在の北海道のバスケットボール界の状況をみると、戦前から戦後にかけての黄金時代は見ると影もなく衰退の一途をたどっている。とくに学生においては昭和35年に北海道の王座についた学芸大学札幌分校以来、実に12年間にわたり王座の椅子を一般・実業団に明け渡している。学生は練習時間・練習コートなど練習の条件は一般・実業団よりもよく、なにゆえにこのような低迷を続けなければならないのか、深刻な反省をすべきであり学生の奮気が望まれるところである。

このような状況で、学生が北海道の王座を奪還し、さらに全国にもその存在を認めさせるには、選手の資質は勿論のことながら、これを鍛え育てていかなければならないコーチの役割が重要になってくる。現在、北海道の大学チームを指導している者は何人か居るが、どのコーチにしても単に自らの経験とわずかな文献から得た資料に頼りながら指導しているにすぎず、オフィシャルゲームなどについても市販のスコアブックによって得点に関するデータを得ることで満足しているようである。コーチがこの程度の水準で満足しているのであれば、選手が強くなることは望めない。ゲームの実態把握と勝敗因に関するプレイの認識がなければ選手の要求にも応ずることができない。したがってコーチはチームを指導する以上、責任のある態度で指導することが望まれるのである。

コーチは選手の技術的・身体的・精神的な特性を理解し、それらに即してトレーニングの方法をくふうし、プレイさせるのがその役目であるが、今回は本学のバスケットボール部員を対象に性格特性とゲームの特徴について分析し、ゲーム反省の資料にするとともに、北海道の学生バスケットボール界が低迷から立ち直るための今後の指導の基礎的資料を得るために調査研究をするものである。

II 方 法

1. 時 期

- 1) TSPI 性格テスト 昭和47年5月4日
- 2) オフィシャルゲーム 昭和47年5月20日～12月3日

2. 対 象

- 1) TSPI 性格テスト 札幌大学バスケットボール部員 男子14名
- 2) オフィシャルゲーム 札幌大学およびその対戦チーム 11チームのべ19試合
記録用紙は、本調査のために必要事項が記録できるように考案した。

III 結 果 と 考 察

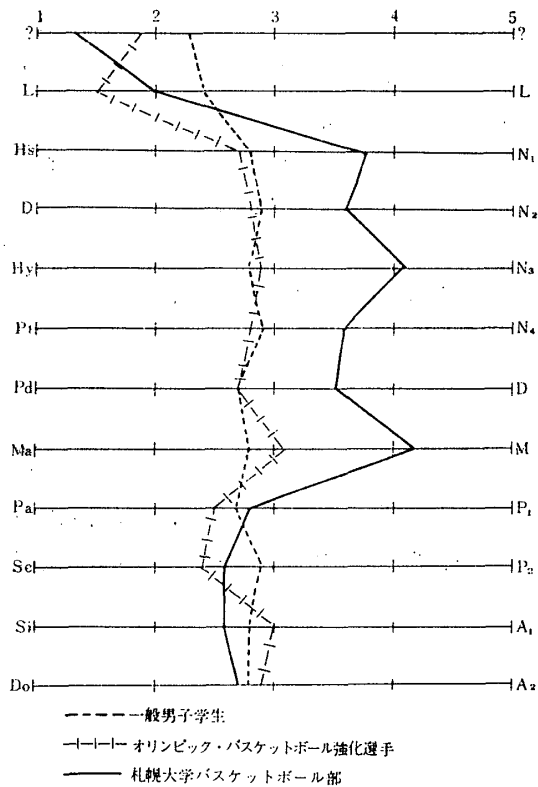
1. オリンピック強化選手との比較およびスタートメンバーについての検討

TSPI に関する結果は第1表のとおりであるが、第1表をプロフィールにあらわしたもの

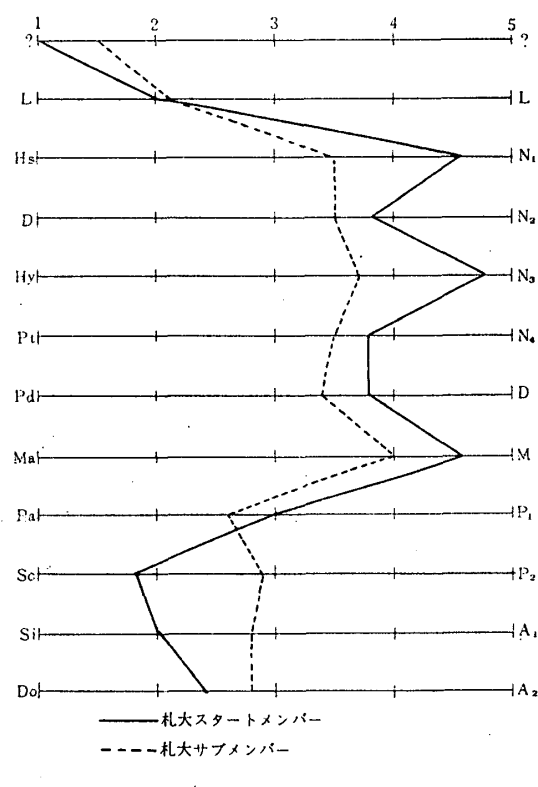
第1表 TSPI 標準点平均値

TSPI	MMPI Y-G	標準点平均						
		一般学生	オリンピック バスケット	札大	有意差	札大 スタート・M	札大 サブ・M	有意差
?	?	2.3	1.9	1.3		1.0	1.5	
L	L	2.4	1.5	2.0	*	2.0	2.1	
N ₁	Hs	2.8	2.7	3.8	*	4.6	3.5	
N ₂	D	2.9	2.8	3.6		3.8	3.5	
N ₃	Hy	2.8	2.9	4.1	*	4.8	3.7	
N ₄	Pt	2.9	2.8	3.6		3.8	3.5	
D	Pd	2.7	2.7	3.5	*	3.8	3.4	
M	Ma	2.8	3.1	4.2	*	4.6	4.0	
P ₁	Pa	2.7	2.5	2.8		3.0	2.6	
P ₂	Sc	2.9	2.4	2.6		1.8	2.9	
A ₁	Si	2.8	3.0	2.6		2.0	2.8	
A ₂	Do	2.8	2.9	2.7		2.4	2.8	

* 5%で有意



第1図 オリンピック強化選手と札幌大学の選手との比較



第2図 スタートメンバーとサブメンバーの比較

が第1図・第2図である。

第1図によれば一般学生とオリンピック強化選手（東京オリンピック）のプロフィールはほぼ類似している。花田らはスポーツマンは一般に些事にこだわらず、公正で明朗快活、社交的であるが、煩雑なことは好まず、あまり思索的でないといっている。また笈田らはバスケットボール選手の性格特性を攻撃的な性質、一般的活動性、人といっしょにはしゃぐ、いつも何か刺激を求める衝動的な性質といったスポーツマン的性格傾向が強い。また強いチームでは自信が強く、社会的外向的性に富んでいるといっている。オリンピック選手はこのような性格の傾

向があるものとみていだろう。これに対し本学の選手はオリンピック選手よりも見せかけがやや強く、身体的機能に多くの関心があり、活動的であるが神経質的傾向が強いとみられる。また第2図よりスタートメンバーとサブメンバーを比較するとスタートメンバーに、より強くその傾向があらわれている。L尺度ではオリンピック選手と本学の選手は5%の有意差がありオリンピック選手は見せかけが少ない。スタートメンバーはサブメンバーより有意ではないが見せかけが少ない。これはプレイが上達すれば見せかけが減少する傾向とみてよいだろう。すなわち技術的な向上は性格に影響（虚構的傾向から自信に充ちた余裕のある傾向）を与える可能性があるものと考えられる。

つぎにN尺度群（身体機能への関心を示す）のHs（とらわれ）・D（気が重い）・Hy（むら気）・Pt（不安感）のうちオリンピック選手と本学の選手のあいだにはHs・Hyが5%の有意な差で本学の選手がとらわれ傾向とむら気の傾向が強くてでている。

Hs尺度は、“自分の身体や健康に対しとりこし苦勞をする傾向”であるが第2図のようにスタートメンバーにその傾向が強くてでている。本学のスタートメンバーと対戦チームのスタートメンバーの平均身長を比較すると第5表のようになっており19試合中13試合については平均身長が劣っていることから、その被害意識やコンプレックスを持っていることが推察される。バスケットボールにおいては身長差はかなり決定的なハンディとなることは過去の研究データからも否めない事実であるが、本学の選手は身長ばかりでなく、ものごとにとらわれる傾向があるように思われる。

D尺度は、この得点が高ければ“やや抑うつ傾向であるが、スポーツ選手では、決断力のぶさや健康について心氣的であり、午前中よりも午後の方がよくなる傾向がある。またコンディションの変動が激しく、一度つまづくとなかなか立ち直りにくい”といわれる。オリンピック選手がそのような抑うつ傾向が少なく、コンディションの変動が少ないのは当然で、好不調の激しいものは危険でコーチとしては試合に使えないという条件があり、この条件にかなった選手がピックアップされるからであろう。したがって本学には心氣的なためコンディション調整のまずさがあったり、安定性がなかったり、まだまだ安心して使えるプレイヤーがい

第2表 TSPI 標準点分布

TSPI	MMPI Y-G		標準点段階					有意差	TSPI	MMPI Y-G		標準点段階					有意差
			1	2	3	4	5					1	2	3	4	5	
?	?	オ	11	5	3	0	2		D	Pd	オ	7	3	4	4	3	
		札	13	0	2	1	0				札	3	1	1	7	4	
L	L	オ	15	2	3	1	0		M	Ma	オ	3	6	3	4	5	
		札	7	3	4	2	0				札	1	2	1	1	11	
N ₁	Hs	オ	5	6	2	6	2		P ₁	Pa	オ	8	1	8	2	2	
		札	2	2	1	3	8				札	4	3	4	3	2	
N ₂	D	オ	5	5	3	6	2	*	P ₂	Sc	オ	7	7	1	4	2	
		札	1	0	7	4	4				札	4	5	3	2	2	
N ₃	Hy	オ	6	2	5	4	4		A ₁	Si	オ	5	2	5	5	4	
		札	2	0	2	3	9				札	6	3	1	4	2	
N ₃	Pt	オ	6	4	1	8	2		A ₂	Do	オ	5	2	7	5	2	
		札	1	2	4	4	5				札	5	2	4	3	2	

* 5%で有意

ないことをあらわしている。とくにスタートメンバーにその傾向が目立っている。なおD尺度の分布については第2表のように χ^2 検定の結果、オリンピック選手と本学の選手とでは5%で有意な差が認められた。他の尺度についてはいずれも有意差はなかった。

Hy尺度は“むら気であったり、自己主張の強い人の行動特性にあらわれる”とあるが、オリンピック選手でこのような行動特性をもっているものは安心して使えないということで身体的・精神的にも一貫性をもつ(安定している)ことが要求されるのであろう。それに対し本学ではスタートメンバーにこの傾向が強く、ゲームなどにも精神的に不安定な場面がたびたび出てくることでもわかる。すなわちデータにはあらわれていないがゲームの途中で1・2度は得点のペースが落ちる無気力な時期(瞬間攻撃率の低下)があったり、一気にリードしても追いつかれる(ホッとしたためもあるが)時期がくることがあることなどからも理解される性格特性である。

Pt尺度についてはオリンピック選手と有意な差はないが本学の選手が高い数値を出している。この尺度が高得点であれば“不合理だと思ったことが自己の意志に反してつよい圧迫感をもってせまるので、つねに不安感をもっている。したがって観念のとりこになり、雑念が浮んで意識過剰になり、さらに恐怖がともなうようになると自信を失った状態になる。そのため躊躇しがちであるが、反面、何度も几帳面にたしかめないと納得できないようになる”といわれている。

オリンピック選手は技術的にはほぼ完成された状態の選手であるから、不安感からくる自信喪失などは極く少なくなければならぬ。しかし本学の選手は技術的に未熟な選手なので自信のなさそうな傾向が出ているようである。さらにスタートメンバーがサブメンバーよりも強い傾向にあるのは、調査の時期がオフィシャルゲームの始まる以前であったため自分たちの技術がどこまで通用するのかわからないという不安感があったのだろう。このことはHs尺度との関連からも推測される。サブメンバーは自分が直接ゲームに出場するチャンスの少ないことを、それまでのいきさつから察しているため、それほど不安感情は抱かなかったようである。しかし日常生活からも性格形成に影響を受けているので必ずしも調査時期だけの問題ではなく、スタートメンバーに几帳面な傾向の強いものが集まったとみるべらるだろう。サブメンバーのうちでもとくに1年生はこの傾向が強く、バスケットボールをとおして高校までに習ったプレイや考え方が大学である程度否定(説明すると理解はするのであるが)されたことに対する不安感が出ているのであろう。この他にHs・D・HyなどN尺度群にこの傾向が強く、1年入学当時の不安定さが認められる。

Pd尺度はオリンピック選手と本学の選手では5%の有意差が出ている。すなわち本学の選手はオリンピック選手より顕著に性格の偏りがでている。この特異性尺度のなかには自信欠乏・抑うつ・精神的無気力・爆発的・反社会性・感情昂奮などの特徴が含まれているが、スタートメンバーとサブメンバーの選択比率は第3表のよう

第3表 Pd尺度の選択比率

	スタートメンバー	サブメンバー
自信欠乏	0.36	0.81
抑うつ	0.55	1.47
精神的無気力	1.00	1.39
感情昂奮	1.50	0.67
反社会性	1.00	1.33
爆発	4.00	0.57

にスタートメンバーに感情昂奮傾向・爆発傾向が強く、サブメンバーでは抑うつ傾向・精神的無気力傾向・反社会性傾向があらわれている。すなわちスタートメンバーは爆発的な力を出すこともある反面、しぼんでしまう傾向もあると考えられる。コーチは、この爆発的傾向をゲームに生かすくふうをすることが大切であろう。サブメンバーはやや消極的で陰湿な傾向とみられる。オリンピック選手との相異はこのスタートメンバーの特徴による

ものと推察される。

Ma 尺度はオリンピック選手と有意な差があり本学の選手に活発傾向が認められる。またスタートメンバーとサブメンバーのあいだにも差があり（有意ではない）スタートメンバーの活力にあふれた傾向がわかる。これは Pd 尺度のうちでも感情昂奮傾向・爆発傾向が強かったことと一致する。このような特徴をもつスポーツマンは“すぐれた選手になる性格特性の持主である”といわれるが、本学の選手に関してはまだ特性を生かしていない面がある。すなわち第5表の第10試合、対 H・U 戦には何ら為すすべなく頑張る気力もないままに敗れたことに象徴される。このように素質的によい選手が、よいものを出せないでゲームをするということは上っ調子な空転する面があるとも考えられ、今後の指導における課題の一つであろう。

Pa 尺度については“自己の考え方に固執する傾向”といわれるがオリンピック選手と本学の選手には差がなかった。スタートメンバーとサブメンバーにも殆んど差はなく一般学生と同様の傾向である。チームスポーツとしてのバスケットボール選手について笈田らは自信が強く、社会的外向性に富んでいるといい、花田らはチームスポーツの経験者に社会的に外向で活動的で朗らかな性格特性をもっているが、やや攻撃性が強く、主導的立場に立とうとする者が多い傾向がみられるといている。このようなことから Pa 尺度が欠点としてあらわれた場合には問題もあるが、ここではとくに問題を指摘することはない。

Sc 尺度は“感情の動きが貧困で生活態度も消極的であり、対人関係がなんとなく冷淡・無関心である。また決断力がにぶく、集中力が弱く、空想にふけるかあるいは緊張状態があらわれる傾向”であるといっている。オリンピック選手も本学の選手もこのような情意尺度では一般学生より標準点が低く、一般学生より協調的であることをあらわしている。またスタートメンバーとサブメンバーではスタートメンバーの方に協調性がみられるようである。これもチームゲームの特性と考えられるが孤独・自閉的傾向のものは結局チームのなかで浮いてしまい、プレーもこのための緊張により動作がスムーズに行なわれず悪循環を繰返すおそれがある。このような選手はリラクゼーションが大切である。またサブメンバーがスタートメンバーを目指す場合、協調性の変革も考慮すべきことがらである。

Si 尺度もオリンピック選手と本学の選手に差はない。スタートメンバーとサブメンバーには若干の差があるが、これはサブメンバーが高い得点を出している。すなわちスタートメンバーに比較して円滑な交際がしにくい性格特性をあらわしているが、これは劣等感・神経質・不活発などの二次的なあらわれと考えられる。このことは Hs・Pt と関係があり、Ma と反対の関係があるといえよう。サブメンバーはこの性格的な欠陥のために持てる能力を十分に発揮できない傾向があるが、サブメンバーのものも集団の成員であるという自覚をもち、チームのなかの役割を認識し任務を遂行するよう努力することが要求されるだろう。

Do 尺度は引込み思案尺度である。オリンピック選手と本学の選手とのあいだには差がない。スタートメンバーとサブメンバーとではサブメンバーが、わずかにこの傾向が目立つが問題点を指摘するほどではない。ただし主観的観察によれば、本学の選手は自主性に欠ける面があるように思われる。これは指導者が手をかけすぎた結果、自らの努力という基本的な態度を眠らせたのではないかと反省させられる。

以上を特性群別にみると、オリンピック選手は一般学生と殆んど差異はないが、L 尺度のみせかけが少なく、身体的機能に関してもあまり神経質ではなく（N 尺度群）、やや活発で（Ma 尺度）、冷静でひがみっぽくなく（P 尺度群）、社会性も適当に形成されている（A 尺度群）。本学の選手はオリンピック選手と比較すると、みせかけが強く（L 尺度）、神経質で線が細いが（N 尺度群）、活動的（Ma 尺度）である。スタートメンバーはサブメンバーに比較して N 尺度群が強い傾向であるが、神経質的傾向と同時に失敗してもくじけないような強い一面もあ

る。サブメンバーがサブメンバーでいることは技術的な側面と精神的・性格的側面があると思われるが、好ましいスポーツマン的性格形成を目指すためには、技術的に上達し、自信と安定性をもつことが大切であると同時に、コーチによる適切な助言が必要であろう。

2. ゲームにおける個人の特徴と性格について

ゲームにおける各プレイヤーの活躍の仕方はポジション・対戦相手・出場時間など各種の要因によって常に一定ではないが、ゲーム全体のなかで、どの程度チームに貢献したかという指数を考えれば比較することが可能になる。そのために第4表・第5表にあるような貢献度を算出した。貢献度はゲーム中に味方にとってプラスになるプレイを1回すると+1点を与え、マイナスになるようなプレイを1回すると-1点とし、+-の差し引きを出場時間で割り、単位時間あたりの貢献度の良否をあらわすものである。

第4表をみると夏休み以前のシーズン前半10試合と夏休み後のシーズン後半9試合の各プレイヤーの貢献度は前半の方が優れている。これはシーズン前半は本学もさることながら対戦チームも、チームとして未完成の状態で行っているためであって、ミスプレイの出現率も大きくなると考えられる。このような予測のもとで相手のミスプレイを多くするためには攻撃回数を増加させることが考えられ本学の戦術の一つとした。その結果第5表のように攻撃成功率も43.2%と39.8%の相手よりも高くなり個人の貢献度もよくなったものである。シーズン後半になると対戦チームもあらゆる意味で完成しつつあり、レベルの高いゲームになってくる。このような段階でのゲームではミスも少なくなるため戦術の転換が求められる。攻撃回数を減少させ効率のよい攻撃をして成功率を高める必要がある。その結果は本学の攻撃成功率43.7%に対し、対戦チームでは50.4%と本学を上回る攻撃成功率であった。このため本学のプレイヤーのミスも増加し貢献度に影響が出たものである。

このような経過のなかで貢献度について代表的なタイプの4選手についてみるとスタートメンバーのR.Nは年間を通じて0.654と最高の貢献度であるが第4表のように得点・アシスト・インターセプトのプラス項目でチーム第1位であり、マイナス項目のミスプレイも多

第4表 個人記録

	出場回数	プラスのプレイ				マイナスのプレイ		出場時間 (分)	貢献度		
		得点	アシスト	リバウンド	インターセプト	ミスプレイ	ファウル		前半	後半	平均
1 S. O	18	55(3.1)	4(0.2)	22(1.2)	16(0.9)	17(0.9)	28(1.6)	117(9.8)	0.351	0.225	0.288
2 M. S	19	274(14.4)	12(0.6)	29(1.5)	112(5.9)	31(1.6)	58(3.1)	607(31.9)	0.658	0.438	0.548
3 S. T	18	48(2.7)	2(0.1)	29(1.6)	24(1.3)	21(1.2)	28(1.6)	216(12.0)	0.250	0.132	0.191
4 N. A	19	201(10.6)	13(0.7)	117(6.2)	64(3.4)	28(1.5)	76(4.0)	489(25.7)	0.642	0.477	0.560
5 K. W	14	24(1.7)	—	12(0.9)	17(1.2)	12(0.9)	21(1.5)	113(8.1)	0.177	-0.002	0.088
6 T. N	19	185(9.7)	8(0.4)	110(5.8)	52(2.7)	58(3.1)	71(3.7)	518(27.3)	0.461	0.402	0.432
7 S. K	19	188(9.9)	12(0.6)	64(3.4)	94(5.0)	29(1.5)	48(2.5)	592(31.2)	0.494	0.504	0.499
8 R. N	19	281(14.8)	22(1.2)	92(4.8)	141(7.4)	64(3.4)	54(2.8)	594(31.3)	0.761	0.547	0.654
9 S. Ko	7	22(3.1)	—	4(0.6)	5(0.7)	10(1.4)	8(1.1)	42(6.0)	-0.117	0.727	0.305
10 K. S	2	7(3.5)	—	6(3.0)	1(0.5)	2(1.0)	3(1.5)	14(7.0)	0.729	—	0.729
11 T. K	11	27(2.5)	—	12(1.1)	8(0.7)	11(1.0)	22(2.0)	84(7.6)	0.116	-0.180	-0.032
12 M. Y	10	34(3.4)	—	22(2.2)	8(0.8)	18(1.8)	18(1.8)	112(11.2)	0.098	-0.054	0.022
13 K. Y	13	48(3.7)	1(0.1)	13(1.0)	11(0.9)	12(0.9)	27(2.1)	99(7.6)	0.462	0.080	0.271
14 H. K	9	58(6.4)	—	25(2.8)	22(2.4)	16(1.8)	25(2.8)	144(15.9)	—	0.419	0.419
チーム 1試合平均		76.4	3.9	29.3	30.1	17.3	25.6		0.391	0.286	0.339

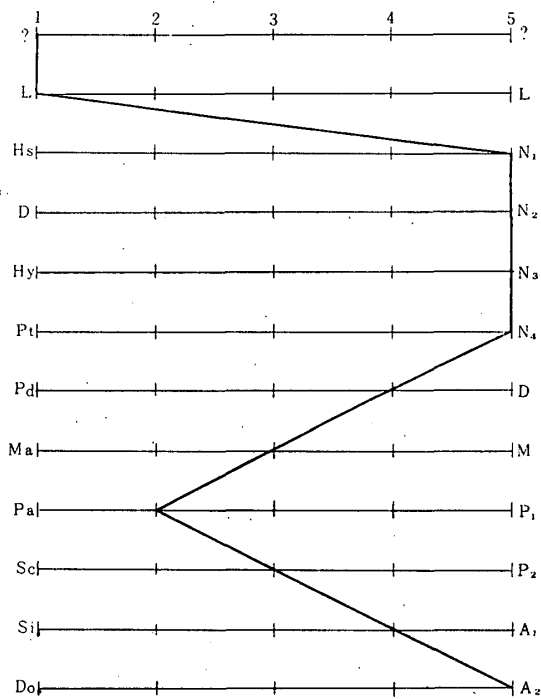
() 内は1試合平均

第5表 チーム記録

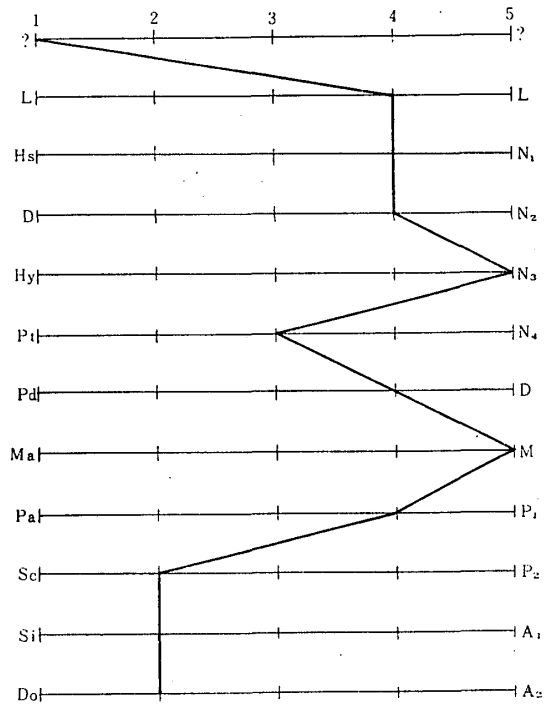
試合番号	札幌大学 対チーム	攻撃成功率			得点		出場 人数	マイナ スプレー イヤー	貢献度				スタートメンバー		
		攻撃 回数	成功 回数	成功率 %	得点	差			チーム 平均	最高	最低	平均 身長	差		
1	S.S.O	136	52.0	38.2	104	51	11	1	0.802	1.636	N A	-0.250	SKo	175.0	-1.2
		127	26.5	20.9	53		9	1	0.176	0.725		-0.300		176.2	
2	M. M	96	30.5	31.8	61	-16	10	4	0.096	0.408	S K	-1.000	T N	175.0	-2.2
		107	38.5	35.9	77		7	3	0.286	1.333		-0.430		177.2	
3	H.U.M	101	56.0	55.4	112	56	12	1	0.599	1.748	R N	-0.182	S T	175.0	-1.2
		57	28.0	49.2	56		12	2	0.076	0.457		-0.667		176.2	
4	S. K	95	46.0	48.5	92	35	12	0	0.592	1.333	K S	0	T K	175.0	1.2
		71	28.5	40.2	57		8	2	0.204	0.600		-0.250		173.8	
5	H. U	79	36.0	45.6	72	11	7	0	0.422	0.920	N A	0	M Y	175.0	-0.2
		70	30.5	43.6	61		8	2	0.280	0.750		-0.300		175.2	
6	S. K	104	46.0	44.2	92	31	12	1	0.441	0.867	S T	-0.200	SKo	175.0	1.2
		80	30.5	37.1	61		7	1	0.245	0.500		-0.027		173.8	
7	G. U	77	40.0	52.0	80	11	11	1	0.442	0.750	S O	-0.500	M Y	175.0	-2.0
		84	34.5	41.1	69		9	1	0.224	0.720		-0.333		177.0	
8	H. U	74	39.5	53.3	79	2	8	1	0.337	0.800	M S	-0.333	S O	175.0	-0.2
		76	38.5	50.6	77		7	1	0.307	0.800		-0.475		175.2	
9	G. U	80	35.5	44.4	71	18	11	1	0.260	0.600	S K K Y	-1.000	SKo	175.0	-1.8
		61	26.5	43.4	53		7	0	0.248	0.657		0.025		176.8	
10	H. U	84	29.0	34.5	58	-30	12	6	0.125	0.962	T N	-0.500	M Y T K	175.0	-1.4
		78	44.0	56.4	88		10	1	0.551	2.000		-0.250		176.4	
11	R. U	95	48.0	50.5	96	39	12	0	0.594	1.135	R N	0.292	S T K W	176.4	4.8
		58	28.5	49.1	57		7	0	0.340	0.583		0.156		171.6	
12	S. K	66	34.0	51.6	68	20	10	1	0.064	0.545	R N	-2.000	T K	176.4	2.2
		54	24.0	44.4	48		5	0	0.300	0.675		0.025		174.2	
13	G. U	87	33.0	37.9	66	9	9	1	0.298	0.778	S K	-0.250	S O	175.0	-1.6
		62	28.5	46.0	57		9	1	0.328	0.572		-0.032		176.6	
14	H. U	91	40.0	49.6	80	1	8	1	0.476	0.823	N A	-0.200	T K	175.0	-3.8
		73	39.5	54.2	79		7	1	0.305	1.000		-0.250		178.8	
15	M. M	79	30.0	38.0	60	-28	10	1	0.414	0.833	N A	-0.125	S T	175.0	1.6
		84	44.0	52.4	88		7	0	0.842	2.500		0.333		173.4	
16	O.P.U	64	31.5	49.2	63	-5	9	1	0.199	0.471	T N	-0.333	S O	175.0	-6.0
		63	34.0	54.0	68		8	0	0.321	0.861		0		181.0	
17	G.F.U	90	35.0	38.9	70	-15	11	2	0.142	0.757	N A	-1.000	K W	175.0	-3.6
		67	42.5	63.4	85		7	0	0.399	0.700		0		178.6	
18	H.R.OB	81	32.0	39.5	64	3	11	1	0.416	0.709	T N	-0.375	M Y	175.0	0.8
		64	30.5	47.7	61		6	0	0.296	0.500		0.128		174.2	
19	K. club	68	32.0	47.1	64	-2	11	4	0.034	0.806	R N	-1.333	T K	175.0	-6.4
		85	33.0	38.9	66		7	0	0.387	0.850		-0.044		181.4	
札幌平均		86.7	38.2	44.1	76.4		10.4	1.5	0.339	0.888		-0.355			
相手平均		74.8	33.2	44.4	66.4		10.0	7.7	0.8	0.322	0.883	-0.157			

上段は札幌大学

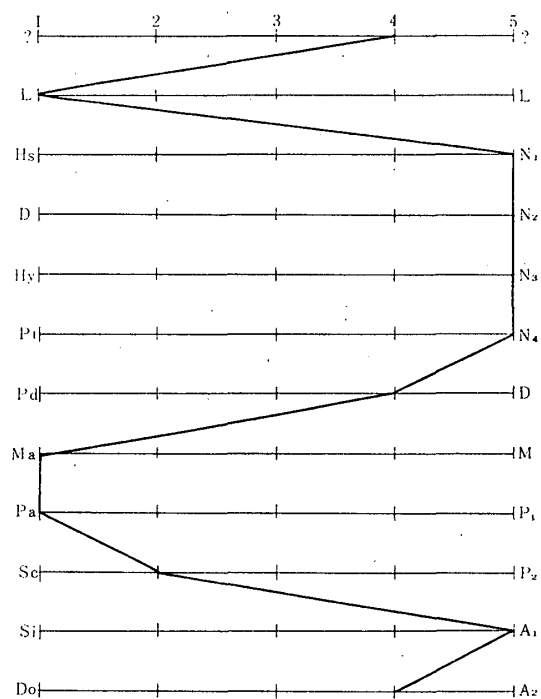
い選手である。R・Nは高校時代から敗れた経験の少ない強いチームのレギュラーメンバーであったが身長は172 cmと小さい選手である。第3-1図をみるとN尺度群の得点が高く、自己主張や自我感情が強く、失敗してもくじけないタイプであり、昂奮・爆発的傾向もみられる。したがって頑張るところもある反面それが過度になり、ミスにもつながることがある。練習態度は努力型であるが下級生に対し支配的な態度をとることがある。A尺度群が強い傾向を示しているが、チーム内の立場上(リードマンとしての立場)、そのようなことがおこるのかもしれない。このような選手はチームにとって必要な選手であり、チームの索引力になるタイプである。



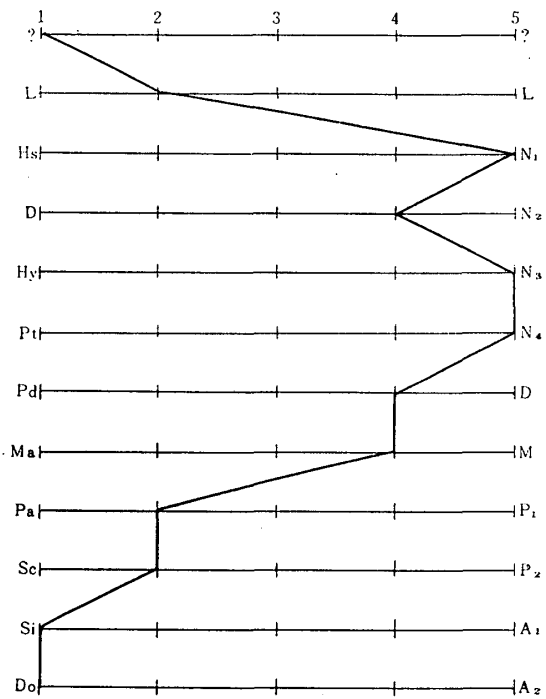
第3-1図 R. N



第3-2図 N. A



第3-3図 T. K



第3-4図 H. K

つぎに貢献度トップを一番多くとった N.A についてみると、N.A は本学の長身選手の一人であり上級生でもあることから、チームメイトからは期待されている。貢献度トップを5回とっているが、そのうち勝ゲーム3回（うち1回はクロスゲーム）、敗ゲーム2回となっている。クロスゲームであればあるほど長身選手に対する期待は大きくなり、シーズン後半にクロスゲームが増えているが N.A は一応期待に応えたといえるだろう。ただしこの選手は非常に好不調の波の大きな選手であり、いつ力が出るのか判断のつかない難かしいタイプである。第3-2図のようにスタートメンバーのなかでL尺度の得点が高く、他の4人とは異っている。またN尺度群ではD・Hyの解釈に特異性があるように思われる。すなわち、決断力が乏しく・コンディションの変動が大きく・抑うつ傾向にあり、さらに自己主張の強い面があり・スポーツマンとしては線の細は選手であるが、シーズンが深まり大切なゲームが多くなるにしたがって自分の特徴（身体的・精神的）を自覚しはじめて、忠実な努力をするプレイヤーになってきた。またL尺度が高得点であったことは、自らの欠点を自覚していても、強く見せようとして指導者の意見を受け入れず、内面では常に反撥を持っている場合があるので、このようなプレイヤーのコンディション調整には身体的・技術的な指導もさることながらカウンセリングによる心の緊張をやわらげてやるくふうが伴わなければならない。

つぎに年間トータルでマイラスプレイヤーになった T.K は1年生で、本学では長身者の部類に属する選手である。高校時代はチームの中心になって活躍した選手であるが結果はマイナスプレイヤーであった。プロフィールは第3-3図であるが無答数が多く決断力に欠け、防衛反応の強いタイプである。とくに Pt では不安感・自信喪失などが推察される。また几帳面な性格であることから、これからの大学生活に対する各種の不安・プレィに対する不安などが内面的にあるところへ、当時腰を痛めてしばらく練習を休んでいたハンディがさらに強い自信喪失へ追いやったものと思われる。スポーツマンとしては N.A よりも繊細な性格とみられるが、この選手を立ち直らせるには自信を回復させることにあり、そのチャンスを与えてやる必要がある。

つぎに H.K は1年生であるが、本学のプレイヤーのなかでは最も身長の高い選手である。高校時代はあまり恵まれないチームに居たが身長が高いということでチームの中心的プレイヤーであった。本学に入学当時は、技術的に拙劣であったため自信をなくしており、シーズン前半のオフィシャルゲームは出場できなかった。しかし夏季の強化練習で伸びてきたので自信を回復し、シーズン後半では1年生のなかでは一番貢献するプレイヤーになった。第3-4図によると Hs・Pt が高得点であるが、これは調査当時、自信を失ない不安感が高まっていたのだろうと思われる。しかし、ある時期にきっかけをつかむと Hy があらわすように調子にのり、するすると伸びたものと考えられる。このきっかけはコーチが意図したものではなかったが、一度調子にのると精神的にも技術的にも安定した様子になってきた。これはA尺度群の得点からも推測できるものである。

IV ま と め

いままでみてきたように選手個々に対する指導は心理的な専門知識や専門技術が必要であり、現状ではどのチームも外国なみのこのような専任コーチを置ける状態ではない。しかし、現在チームを指導している者が、このような心理学的な知識や技術を身につけ、科学的な練習を組み立てチームや個人の指導にあたらなければならない。それというのも、いままで見てきたように本学の選手の性格とゲームの状況とは極めて相関があると見られるからであり、とくに新入部員についてはこの種のテストを実施してみる必要がある。また2～4年生に対しても継続的に実施することにより性格の変化も知るとともに、それぞれの年度の最適なプレイヤー

を選ぶことも可能であろう。いままでの選手決定は比較的技術優先の傾向があったことは認めざるを得ないが、選手を決定する以前の段階、すなわち練習時における選手の精神状態の観察およびその指導をおろそかにすることはチームを勝利に導くことに対する手抜きである。ましてやゲームにだけ顔を出すコーチは論外で選手に対する重大な挑戦といわなければならない。ゲームに勝つということは単にゲームに勝つことではなく、平常時の練習や生活態度がすべて勝つための努力であり、その結果として勝利を得るのである。指導者がこの日常性のなかでどのように選手の内面へ入り込めるかが勝利のポイントであろう。

今回の調査研究はまったく稚拙であるが、以上のようなコーチの立場から1年間の指導資料とその結果にもとづいて考察したものである。これを足懸りにさらに心理的な知識と技術にそって、より有効な指導法を研究しようという第一歩である。

参 考 文 献

- スポーツ科学委員会：TSPI 性格テストの手引き，日本体育協会。
 スポーツ科学委員会：TSPI 性格テスト作成，日本体育協会。
 スポーツ科学委員会：昭和45年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告，No. II，TSPI改訂のための研究，日本体育協会。
 心理学実験指導研究会：実験とテスト。
 チェルニコワ：スポーツマンの心理学，ベースボールマガジン社。
 花田・竹村・藤巻：スポーツマン的性格，不昧堂。
 品川・鈴木ほか：臨床心理事典，岩崎書店。
 宮城音弥：岩波小辞典，心理学，岩波書店。
 MPI 研究会：新・性格検査法，誠信書房。
 八木・佐治：講座 心理学 10. 人格，東京大学出版会。
 ケイロード：現代コーチングの心理学，講談社。
 松田・清原：スポーツ科学講座6 スポーツの心理，大修館。
 長江ほか：健康管理のための調査・統計，医歯薬出版。
 吉井四郎：スポーツ作戦講座1 バスケットボール，不昧堂。
 岩原信九郎：教育と心理のための推計学，日本文化科学社。
 岩原信九郎：新しい教育心理統計 ノンパラトリック法，日本文化科学社。
 新井春生：バスケットボールにおけるリヴァンドについて，体育学研究，Vol. 12, No. 5。
 島田・笈田・武智：バスケットボール選手の性格特性，体育学研究，Vol. 13, No. 5。
 笈田・島田：バスケットボールの試合内容の分析，体育学研究，Vol. 13, No. 5。
 井関真欣：バスケットボールの勝敗を決定する要因について（リバウンドボールについて），体育学研究，Vol. 13, No. 5。
 一井・小森・嶋田・多久和・石川：バスケットボール選手の体格及び体力について（その8），バスケットボール選手の身長推移と成績について，体育学研究，Vol. 14, No. 5。
 吉川昌弘：バスケットボール競技における身長の位置 ——東京・メキシコオリンピックより——，体育学研究，Vol. 15, No. 5。
 石川・小森・嶋田・多久和・一井：Basket Ball における心的条件と試合成績について，日本体育学会第22回大会号。